

春楡の若葉の中 早春の花咲く上高地へ

「ハルニレ」の名前を聞いたのは秋の淀川辺りでアキニレを知った時だった。「アキニレ」のガサガサした木肌と小さな葉に衝撃を受けた。

「ハルニレ」と言う植物もあるけど、この辺にはないと言われた。秋に対して春、一体どんな木なのだろう。見てみたい。この時「ハルニレ」は心の琴線に触れ「春楡」となった。

春楡に会いたいとずっと願っていた。どうやら今度行く上高地にあるらしいとの情報でハ

ルニレを調べた。それまで葉っぱというのは左右対称が当たり前と思っていたのに、このハルニレの葉っぱは面白い形をしていた。こんな形の葉っぱならすぐに分かると思い上高地を訪れた。しかし目が届く所にハルニレの葉はなく、なんとなくこの木かなという程度で甘んじなければならなかった。



ハルニレ

あれから6年。Noi-Kyotoに入り2年。今回、春の上高地の宿泊例会の企画が出来る事になった。ニリンソウはもとより「春楡」の芽吹きに会えると舞い上がった。そう願ったのに1日目は上高地の早春の花々に心うばわれていた。2日目の朝、徳澤園を出て広々とした場所でSさんが「今回の目的は何でしたか。」と皆に問うた。しどろもどろに答える私。見渡す限りの木々の前で「これがハルニレです。」とSさんが言った。見上げると若葉をつけた木々の間から朝陽が降りそそいでいた。一枚の葉や一本の木でなく大自然の中の「春楡」との出会いであった。空洞がある木があった。「がんばるように言ってあげて。」そう言われ木肌に手を触れ語りかけた。

大木はまだ若葉。太陽の光は十分に草花に届いていた。中でも陽の光が降りそそぐニリンソウの群生は圧巻であった。しかし私以上にニリンソウたちは今を謳歌していた。やっとな雪が融け芽吹き、陽の届く間に花を咲かせ実をつける。スプリングエフェメラルたち。7月初旬の上高地しか知らなかった私には、見渡すかぎりのニリンソウの光景は新鮮で不思議だった。木々の葉が茂り太陽の光が充分届かなくなると跡形もなくなる。いつなら陽の光に浴せるのか大自然の営みの中で

木本植物と共存する知恵を身に付けた春の妖精達の一端を目のあたりにした。



倒木更新の木

今回の旅で一番の感動は何ととっても不思議な木との出会いである。これもSさんの問いかけが無ければ不思議な木で終わっていた。あ

るいは素通りしていたかもしれない。その木は大木の下にタコの足のようものが絡みあい大木を支え中は空洞になっていた。「何故こんな形になっていると思う。」「根っこの所にあった土が大水で流れた。」そう答える私たちに「これは倒木更新によるものです。」と解説をして下さった。何らかの理由で倒れた

木。苔むしたその倒木に種を落とし、やがて成長し小さな木が天に向かい伸びて行く。何百年という時間の流れの中で根も幹も伸ばし運よく大木に成長し、その頃には土台になった倒木は朽ち、その部分がき空洞になったのだ。その後よく見ると倒木更新の木があちこちにあった。今まで倒木の上の芽生えは幾度となく見たことはあったが、このような大木に成長した姿は初めてだった。一体どれだけの時が流れたのだろうか。自分の持つ時のスケールを超えた、森のスケールの大きさ、大自然の悠久の時間の流れに圧倒された。



タケシマラン

今回、事前にニリンソウの花咲くころに出会えるだろうと思った植物の絵を描き、出会った時に分かるように準備していた。しかし、本と実物は違い間違いもあった。すぐ解り細かな所まで観察出来た植物もあった。また1日目にザリコミを知るだけで精一杯だったのに、2日目はザリコミの小さな花を写真に収める事によって雌木と雄木の違いもわかった。



ザリコミ

よくSさんから「花が咲いていないから同定がはっきり出来ない。」と聞いていたが、花は自己を最大限に表現している事を改めて知った。

事前学習をしても植物の見分けは難しかった。質問に対してSさんは常にシンプルに答えてくれた。タケシマランの見分けるのはどうするのですか？

「先が尖る。三行脈、脈が凹む、最後裏を見て花を確認。」

ツルアジサイの見分けは？「鋸歯が深くない。」的確な言葉で教えて頂くと次に自分で探すことが出来たから不思議だ。教えて頂き、それを確認しあう仲間がいるという最高の観察会であった。

今回沢山の植物を観察出来た事以上にnoi-kyotoの仲間と触れ合う事が出来た事が何よりの喜びだった。

短い時間ではあったが、それぞれの方の人生観から学ばせて頂くことが沢山あった。有り難うございました。 (正木文枝)



ニリンソウ